許せぬ資本の大災害責任

別項記事に見るように、三池大災害十七周年抗議大集会は、働く者の怒りを燃えあがらせ、参加した原告団は改めて三池大災害裁判勝利をめざしがんばる決意を固めた。次に、遺族の渡辺さんの手記を紹介する。（なお、原告団の決意表明は本紙の次号に）

この怒り、どう表現したらよいか

遺族　渡辺　ミドリ

今年もあの忌まわしい、十一月九日がめぐってきました。

私たち三池縫製に働く遺族たちは、集会の翌日の昼休みにさっそく集まって話し合いました。

最初に出た意見は――

「私たちにはこの日が昨日のことのように思い出されるのに、もう十七年も過ぎた。そのせいか集会の参加者がいつもの年より少ないようだった。

それでも、集会の第二部での溝口さん（遺族会長）の言葉を聞いていると、あの頃のお父さん（亡夫のこと）のことが改めて思い出され、涙が出てならなかった。

〝三池にまなぶ集会〟に参加の人や、各地の働く人びとが多勢集会に参加しておられたが、〝まなぶ〟の人の胸に『兵庫』と書いてあるのを見て、遠いところからきておられるのだなアと感心もし、有難いとも思い、連帯の力強さをつくづく思った」

考えさせられたのは、田中さんの話でした。

「溝口さんが、遺体をホースで洗っていたことをいわれていたけど、私のお父さん（同前）は、看護婦さんがホースで洗っていたときピクッと動いたのを先生（医師のこと）が気づき、『これは生きている』といって別にされたと聞いている。それに、お父さん（同前）は、爆発の日に救助隊のなかにいた友人が一番につれ出し『この人のことはたのんどく、まだ生きとるけん』といって、救助のため坑内にいかれ、それが、死体洗い場で、生きているところを見つけられたのが翌る日――十日の朝で、それも四時を過ぎていたと。ところが最後に、お父さん（同前）が死んだということを聞いたのは十二日だった。

ほんとうは、死なずにすんだのかも知れないと思うと、ほかに手当のミスもあったのではないか、などと聞けば、何か胸のなかにむくれあがってくるものがある。これが怒りだろうか」

今日ばかりは、いろいろと入りまじり、何と表現したらよいかわからない思いです。

×

筆者は、三池縫製勤務です。

原告団消息

10月27日　野田嘉次郎さん（62歳CO患者）曙病院へ入院。

28日　堀田武夫さん（新港作業所）天領病院へ入院。

30日　原告団企画事務局会議。

松藤嗣次さん曙病院入院。

31日　原告団役員会議。

11月4日　原告団、ビラ・ステッカー発行。

この日飯島伸子先生（桃山学院大学社会学部教授）ほか四人、職場視察。

5日　みいけ原告団編集会議。

6日　各事業所の社宅でビラを配布。

7日　各社宅関係ステッカーはり

9日　三池大災害抗議集会。市民会館前でビラ配布。

また、金子賢一さん次女―砂恵美さん逝去。

手記　中央でのCO遺族交渉に参加して

原告団は、さきにCO遺族協定の抜本的改正を要求して闘ったことは周知のところですが、その際代表が東京本社で直接会社幹部と交渉したのでした。さて交渉の経過はどうだったか、ここに代表だった二人の人の手記を紹介します。

理解してもらいたい遺族の胸のうち

遺族会事務局長　永江　美由紀

㈠　まず遺族代表五名のえらび方について

それぞれの任務にもとづいて、全体の責任者、西工場代表（年金のない人、首切られた人）、既に死んだ遺族にかわる人、しかし本田さんは足が悪くてできませんでしたので溝口さんと交替。

溝口会長　二人の息子にかわっての抗議。

永江事務局長　協定内容とのかかわりから責任者として。

西工場代表　アソニットの中西和子副会長、三池縫製の木下妙子さん（遺族年金受給しない者として）。

末松ミドリさん　昨年首切られる（厚生年金最下位）。

㈡　遺族会として初めてのことで、それぞれ遺骨を抱いて本店に乗りこんだ理由

昨年アソニットでの定年退職の強行にひきつづき、今度はさらにCO患者切り棄ての逆提案すら予想されたこと。その上最も重要なことは、その後くり返されてきている災害で百三十八人もの者が殺され、九十八人もの重傷、八十七人もの軽傷という、三池炭鉱現場での、人命無視の合理化に対して、私どもは鉄槌を加えたかったし、絶対会社を許せないからでした。

五人は誰にもいわずひっそりとお父さんや息子の遺骨を胸にだいて出発しました。もったいないことですが、「お父さん、私に力をかしてよ。みんなの闘いを応援してよ」と、胸しめつけられる思いの中にこのようにたのんで参加した、こんどの闘いでした。

㈢　三井本店での抗議内容

本店での交渉は十六日の午後五時三十分からでした。別館の、地下室の会議室でした。

入口ひとつの、コンクリート壁にかこまれた、いやな臭気のただよう地下室に腹がたった。坑内のようでした。

「お父さん達も、こうした逃げ場のないガス室と化した、坑内にとじこめて殺されたのだ。それに私達までも……。万一ここで火事でも起こったらどうするのか」

怒りは、ここから始まったのです。

六人の犠牲者の遺骨（溝口さんは二人の息子を奪われたから、二人分携行）を並べ、白菊一輪ずつささげ、蓮の花のローソクを並べて待ちます。

会社側は二宮労務部長、渡辺副部長、大佐古第一課長が代表できました。

「お父さんをつれてきました。おアカリを上げて拝んで下さい」と、きりだしました。

二宮労務部長は初めドキッとした面もちでしたが、やがてマッチをすってローソクに火をともし、私の数珠を手に拝みました。そのほかの人達も……。

「この弔辞をお読み下さいませんか」

あのとき、四百五十五人目の犠牲となられた本田国男さんにささげられた、安田元所長の弔辞を差し出しました。二宮部長は読みあげました。

「お守りするとありますが、会社はどこをお守り下さいましたか。『ご遺族は守っていきます。二度と災害は起こしません。安らかにお眠り下さい』。よくもいえたものです」

死者が、どうして安らかに眠れるものか。大災害後さえ百三十八人も会社が殺しているというのに。

末松さんが切り出しました。

「昨年の十二月十日で、アソニットを首切られました。鉱山やアソニットがいったように、ギリギリ年金が八万円もあれば、と思って退職したら、五万五千二百五十六円です。停止額のためで、その分の四十万八千二十円は鉱山が補償して下さい」

「年金が七年間一銭もないですよ。子どもが一人もいないのも悲しい。からだが弱くて、手術を七回も。やっと四十キロに回復したものの……」

木下さんが泣き崩れました。アソニットの中西さんはいいました。

「昨年の首切りのあとに残った三十八人の遺族は、ひどくなった労働条件で苦しんでいます。遺族のための誘致工場だったはずなのに。私は、生活保護をもらって暮らしたこともありますが、お父さんさえ殺されなかったら……」

二宮部長――「ご苦労はわかります。誠意をもって努力します」

そんなことで許すはずがなく、抗議はさらに続きました。

十七日と十八日、現在のアソニットと三池縫製の両工場は座り込み。まさに二日間の全面ストライキでした。上京団と一つ心になっての奮闘でした。

しかし結果は、金と誉れの御仏前がそれぞれ千円（年間二千円）工場勤務者の七百七十円が九百円に上がったくらいで、薄い成果となりました。交渉団の説明を、情けない思いで聞きました。お父さんたちの遺骨をだいて帰る遺族五人の胸のうちが、理解してもらえるでしょうか。これからも、苦しみに耐えてゆかねばならぬのです。

こんども、あの大災害の資本責任を追及し、遺族の生活補償、CO患者の全面補償、災害の絶滅をめざし、人の命を守るため遺族は闘います。

生きている限り闘うしかありません

CO患者家族の会　石原　まさ子

三年毎に行なわれるCO遺族協定の改訂を、今年こそ抜本的な改訂を勝ち取るため、その前段闘争を強めるものとして、原告団と主婦会、組合の各職場分会との交流を、一日働いた疲れの中で、また三番方は出勤前に行ないました。

その中で今職場には、熱中症を起こすように熱い箇所や、一日中脚を水の中につけっぱなしでの作業の苦しさ、などの実態が出され、やはりお互いの苦しみを出し合うことで、資本の攻撃のきびしさは遺族もCO患者も、また現場も同じだと確認しました。

十月十五日CO遺族諸要求貫徹決起集会を開き、その夜から座り込みにはいりました。

そして島三池主婦会長をはじめ十五名の上京団は、要求貫徹まで絶対帰らないと決意して出発しました。

東京に着き、そのまま炭労へ行き、交渉に協力を要請。あと三井鉱山本社に行き、会社側から出席した仁野宮労務部長ほか三名と交渉しましたが、遺族の方たちが、大災害の犠牲となられたお父さんや息子さんのお骨を分骨して持ってこられた気持を思うと、腹の底から怒りがこみあげてきました。

被災者の私たちが、なんでこんな思いをしながら、人殺しをした加害者の三井鉱山の本社まで出てこなければならないのか、と思うと涙が出ました。

会社代表は、私たち十五名が必死になって、どんなに十七年間の苦しみを訴えても「ウン」とも「スッ」ともいわず、黙ってうなずいているだけで、わかってくれたのか、わかってくれなかったのか、反応はありませんでした。

私たちは会社が返事をするまでは帰らないつもりでしたが、「明日からの交渉の席で誠意ある回答を期待する」ことを確認し、改めて会社に抗議するとともに責任を追及し、いったん宿に帰りました。

そして次の十七日の交渉にあわせて、三井鉱山本社のまわりでビラ配りをしながら、交渉を見守りました。

進展しないままその日の交渉は終り、がっかりして各職場分会よりたくさんの激電がきていて、みんながどんなに力づけられたことか。嬉しく思いました。

十八日は、また交渉です。どうすることもできず、私たちは待機でした。心はいらいらするばかりでした。

交渉は進展せず、そのまま午前三時に終ったと聞きがっかりしました。結果が良くない、と思ったからです。皆さんに伝えましたが眠れませんでした。

明けて翌日の朝八時頃、炭労の伊藤次長と組合長以下三池労組の執行部二名の方が見え、交渉の結果が報告されました。

中身は、きびしいものでした。

「私たちはこのままでは帰れない」と訴えましたが、今後は山元交渉に全力をかけて闘うことを誓い、これから山元の労働基準監督署や労働基準局と闘いをつみ上げ、もう一度出直すことに望みをかけて帰りました。

やっぱり、私たちは生きているかぎり闘うしかありません。仲間の皆さん、ご支援ありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。